『安愚楽鍋』におけることばの様相

――廃語と片仮名表記語の面から――

岡本美保

序

明治初期は、江戸語から東京語へと移り変わる過渡期にあたる。『牛店雑談安愚楽鍋』（以下『安愚楽鍋』と記す）は、その明治初期に刊行された作品で、明治初期の話ことばを最もよく反映し、登場人物の身分や職業、性別によってことばの使い分けが見られるという点で、国語学的価値が大変高い作品である。

そこで、この『安愚楽鍋』を資料として、その漢語や表記の面から、明治初期のことばの様相を見てゆきたいと思う。底本は、国立国語研究所が製作した『牛店雑談安愚楽鍋用語索引』収録の国立国会図書館蔵本を使用した。

本論

第一章　『安愚楽鍋』の漢語における廃語についての考察

第一節　『安愚楽鍋』の漢語

『安愚楽鍋』から一定の基準で漢語を抜き出したところ、六九七語（異なり語数）の漢語を得た。

第二節　現在では使われない語

『安愚楽鍋』の漢語の中から現在では使用されないものをとり出すために、講談社の『日本語大辞典』との対照を行った。その結果、廃語として得た語の数は七三語であった。この中には、語そのものが収録されていないもののほかに、語は収められているがその解釈に『安愚楽鍋』の中での用法が書かれていないものも含めた。前者を廃語㋑、後者を廃語㋺とする。

まず、廃語の使用されなくなった理由を見てゆきたいと思う。この際、森岡健二氏が『近代語の成立』で挙げられた廃語となる理由三つのそれぞれに該当すると思われるものを廃語㋑の中から抜き出してみた。[注1]

〈古い時代の概念事物を表す漢語〉

番新　扇紙　大藩　牛店　半紙　鉄錢

古金　内會　洋藥　西洋学　教導師

「大藩」は明治四年の廃藩置県によって廃止され、「鉄錢」も明治三〇年に貨幣法の公布で通用を停止されたものである。このように廃止された制度などや、事物・風俗・考え方などで古い感じのするものを、ここに挙げた。概念事物がなくなってゆけば、それを表す語が廃語となるのも当然のことだと言えるであろう。

〈同義語の競争に敗れたと考えられる漢語〉

高味　平人　究理学　新聞紙　蒸氣車
西洋人　割煮店　謝義　會主　高名家
座料　地内　活版局　異人館　高値（こうじき）
作料　西洋流　西洋家　困迫　鎖港
年尾　病家　難症　医道　漢家　藥名
漢医　外科〔療〕　悪婆　英学　工人
空乏　洋航　伐錢　歓喜雀踊〔雀躍〕
出訴　戯述　深策

例えば「高味」の同義語で今日用いられているものは「美味」が挙げられるであろうし、「謝義」は「謝礼」、「伐錢」は「罰金」などであろう。また「究理学」は『明治のことば辞典』（東京堂出版）によると

（略）英語 natural philosophy あるいは physics の訳語として用いられたが明治二〇年ごろには「物理学」と交代した。

ということである。「新聞紙」は、新しい話という意味であった「新聞」と混同し、現在では「新聞」の方を用いるようになっている。同一、または非常に似た意味を持つ語がいくつも存在する場合、それらが併存してゆくことはほとんどなく、漢字や読み方が難しかったり、古いニュアンスだったりする語の方がしだいに使われなくなり、姿を消してゆくと思われる。しかし、中には同義語との競争に敗れた原因がはっきりしないものも多い。

〈和語に席を譲ってしまった漢語〉

森岡氏は「碪砆（かる石）」「羸瘦（やせる）」などを挙げておられるが、このように明確に和語と代わってしまった漢語は『安愚楽鍋』には見られないようである。強いて挙げれば「膳所」「賢児」がこの理由にあてはまるだろうか。「膳所」は重箱読みの「台所」にとって代わられた。「賢児」は「賢い子」というよりほかに言い方があるだろうか。

以上のように、それぞれの理由にあてはまると思われるものを大まかに挙げてみたが、全体的に見ると「同義語の競争に敗れたと考えられる漢語」が最も多いようである。

次に廃語㋺について見てみる。廃語㋺としたものには、次の九語がある。

寒中　世界　強勢　激發　内證　一局
新聞　隠賣女（ぢごく）〔地獄〕　格

この中で「世界」「内證」「隠賣女〔地獄〕」の三語は『安愚楽鍋』において、隠語的に用いられているという点で、廃語㋺のほかのことばとは性質が異なっていると言える。

第三節　廃語と登場人物との係わり

第二節で述べた廃語と、人物との間には、どのような関

係があるのかということを、次に考えてみたいと思う。

鈴木英夫氏は『『安愚楽鍋』にみられる漢語とその表記について』の中で、使われている漢語及びその表記の仕方から、登場人物をいくつかのグループに分けられた。それをまとめてみると、だいたい次のようになる。

●漢語使用層というべき人物として「鄙武士」「生文人」「士」「藪医生」「新聞好」の五人が挙げられる。

●漢語使用層の周辺の人々が、「半可」「西洋好」「商法個」の三人と言える。

●いわば、ごくふつうの人々が「町人」「芝居者」「堕落個」「野幇間」「落語家」「歌妓」「諸工人」「文盲」「人車」「茶店女」「娼妓」である。この中では「歌妓」「娼妓」「茶店女」の女性群が漢語と最も縁の遠い存在として考えられる。

鈴木氏は、明治初期の視点から登場人物を以上のようなグループに分けられたが、ここでは、廃語を基にして各登場人物を見た場合に、どのような傾向が表れるかということを見てゆきたい。

そこで、登場人物別に用いている漢語の数とその中の廃語の数を算出し、異なり語数で表1に示した。そしてまた、各登場人物の使用漢語数に対する廃語の数の割合（百分率）を出し、その割合の大きい順に並べたものが表2である。

表2からわかるように、各登場人物の廃語の割合に、あまり大きな差は見られないが、傾向として、だいたい以下に述べるようなことが言えるのではないだろうか。

人物	漢語	廃語㋑	廃語㋺
西洋好	54	6	1
堕落個	33	1	2
鄙武士	30	2	1
野幇間	37	0	1
諸工人	23	1	0
生文人	54	8	1
娼妓	51	0	0
半可	72	7	2
歌妓	51	1	0
文盲	35	0	0
人車	14	0	0
町人	98	8	1
士	37	5	0
商法個	53	1	0
芝居者	51	3	2
藪医生	83	12	0
落語家	39	1	1
茶店女（こ）	40	1	0
茶店女（ひ）	30	2	0
新聞好	122	18	0

＜表１＞

表2の上位三人は「生文人」「新聞好」「藪医生」であり、これらは鈴木氏のグループ分けで漢語使用層とされた人々である。また「町人」をはさんで、漢語使用層の周辺にいる人物とされた「西洋好」「半可」が続いている。一方、廃語が一語も認められなかった「人車」「文盲」「娼妓」の三人は、鈴木氏によってごくふつうの人々と呼ばれた者たちである。すなわち、大まかに見ると、漢語使用層、その周辺の人々、ごくふつうの人々の順に廃語の割合が高いということが言える。したがって、明

生文人(16.7)——新聞好(14.8)——藪医生(14.5)——町人(13.5)——西洋好(13.0)——半可(12.5)——鄙武士(10.0)——芝居者(9.8)——士(9.2)——堕落個(9.1)——茶店女(ひき)(6.7)——落語家(5.1)——諸工人(4.3)——野幇間(2.7)——茶店女(ころ)(2.5)——歌妓(2.0)——商法個(1.9)——人車(0)——文盲(0)——娼妓(0)

（　）内は％

□漢語使用層　□漢語使用層の周辺の人々、その他はごくふつうの人々（鈴木氏によるグループ）

治初期には漢語流行の中心にいた人々、つまり、当時の尖端を行くことばを使っていた人々が、今日のことばは遠い位置にいるという傾向が表れていると言えるであろう。

漢語使用層が用いた漢語には、非日常的で難しいものが多かったので、一般に定着した語が少なく、このような傾向が表れたのだと推測される。一方、「娼妓」などが用いている漢語は当時のごくありふれた日常的なものであったので、そのまま生活に密着し、基本語彙に組みこまれて今日に至ったと考えられるであろう。

表2をもう少し詳しく見てゆくことにしよう。廃語の割合が最も高いのは「生文人」である。「生文人」が漢語使用層の中でも特別な位置にいる人物で、古いことばづかいが強く残っていることを鈴木氏は指摘されている。明治初期においてすでに古いことばづかいをしていると言われる人物が、今日から見た場合に最も遠い存在であるのは当然と言ってもよいのではないだろうか。

また、鈴木氏によって、ごくふつうの人々と呼ばれた人たちのほとんどが表2の下位の方にいるのに対し、その中でひときわ廃語の割合が高くなっているのが「町人」である。「町人」もごくふつうの人々というグループの中では特異な存在で、時代にとり残された古い人物であるというのが、鈴木氏の評であった。したがって「町人」の廃語の割合が高いのも「生文人」と同じような理由であると考えられる。しかしそれに加えて、「町人」の話の相手が「士」であったということも、この結果に影響しているのではないだろうか。「士」は漢語使用層に属する人物で、使用漢語数が九八語と「新聞好」に次いで多い。用いる漢語も一般の人々からすると難しいものであっただろう。「町人」は話題が「士」と共通であったために、自然と難しい漢語を用いることにもなったのであろうが、もともとの使用漢語数が三七語と少ないこともあって表2の上位に顔を見せる結果となったのではないだろうか。

最後に、「商法個」について述べる。「商法個」は漢語使用層の周辺の人々というグループに入っていた人物である。漢語使用層及び「商法個」以外の漢語使用層周辺の人々が表2の上位に位置しているのに対し、「商法個」は、廃語が一語もなかった「文盲」「人車」「娼妓」を除けば最も廃語の割合が低くなっている。ここで鈴木氏が「西洋好」「半可」「商法個」の三人を漢語使用層の周辺の人々と判断した根拠を見てみると、

話の中で漢語を用いる割合は、「漢語使用層」を除いては、

高い方であり、その漢語を漢字で表記する割合も、「漢語使用層」に次いで高くなっている。また、字引などと共通の漢語も、かなり用いている。

ということを挙げておられる。つまり、三人の用いる漢語には、数量的なものや表記というような外観の差はみられないのである。とすると、このグループの中で「商法個」だけ、廃語の割合が非常に低いのは、用いる漢語そのものの差によると考えられるだろう。すなわち、話題によって用いる漢語が違ってくるということから、それぞれの話の内容が関係しているのではないかと推測される。

そこで、それぞれの会話や用いた漢語などを見てゆくと、まず「西洋好」はその名の示すとおり、「西洋」のことを話題にしている。話の随所に「西洋では……」「西洋人は……」などのことばが使われていることから、自分の知っている限りの西洋についての知識をひけらかそうとしている「西洋好」の態度がうかがえる。次に「半可」をみてみると、当時の有名人であった「扇夫」や「喜三郎」「小林椿岳」「北庭筑波」「小さん」といった人々について説明や批評を行っている。「てんぷらといやァ……」「うでといやァ……」「日本一でおもひだしたが……」「はなしといやァ……」というふうに自分のことばを自分で引きとって、非常に落ち着きのない話し方をしているのが特徴である。このせわしなさには、「西洋好」と同じように知っていることをすべて話そうという気持ちが表れていると考えてよいだろう。一方、「商法個」は、

商兵衛さん牛肉は横濱のことだが此家のはずゐぶん食へるねへ、おいらア知己だけ亭主が並より氣をつけて極新しいのを食はせるからはじめての牛店なンぞへはめったにはいらねへヨ

と話し出して、「此あひだ」入った「或牛店」の文句を並べたて、

（牛肉は）屠て二日目あたりが寀上ダネ寀上といやァこんどあめりか十八番から引取ッた羅紗は綿なしの上物ダガ十行李まとめて賈てへもんダガ……（後略）

というふうに商売の話へと展開している。

「西洋好」と「半可」が明治初期特有の世間の様相を話題としているのに対し、「商法個」の話題は今日でも聞かれるようなものである。それゆえに「西洋好」や「半可」の用いる漢語は「全權」「幣習」「新聞紙」「往來」「因循家」「當世」「地内」など、全体的に見ても古いにおいの感じられるものが多い。一方、「商法個」の場合は商売の話が中心であるから、「下落」「目的」「損」「散財」「繁昌」など、現在でも用いる語が比較的多く見られる。したがって、廃語の割合を見たときに、この三人の中で「商法個」だけが他の二人と離れて低い位置にいるのは、やはり話題が影響しているのだと考えてよいのではないだろうか。

以上、廃語と登場人物との係わりについて見てきた。この結果、当時のごくふつうの人々と評された人物たちの用いた漢語は、ほとんどが今日まで残っているということが言えるであろう。また、明治初期の時点で古い人物とされ

ていた「生文人」と「町人」は当然のことであるが、当時のことばの世界において流行の中心にいたとされる人々も、今日からすれば、旧時代的な人物にみえるということが言えるかと思う。そして、これらの人々の中間に位置し、新しがって漢語を使おうとしていると評された三人のうち二人は、その話題が明治独特のものだったため、現在のことばからすれば旧時代的であるように思われ、「商法個」だけは今日にも通じるような話をしていたために、廃語の割合が低いという結果が現れたのである。

これで『安愚楽鍋』の漢語における廃語についての考察を終える。

第二章　『安愚楽鍋』における片仮名表記語についての分析

第一節　今日の片仮名表記語

現在、私たちが用いる文章では、漢字や平仮名に比べて、片仮名表記する語は限られているように思われる。『国語表記事典』（昭和六二年刊）の「片仮名書きの語」には、外来語・外国の地名・人名をはじめとして、いくつかの片仮名書きされる語が記されているが、総じて、現代では片仮名は語表記形式をとっていると言える。

では、『安愚楽鍋』ではどのような場合に片仮名が用いられているだろうか。対象部分は、初編から三編下までの全編で、序や地の文なども含む。ただし、三編上の序は漢字片仮名交り文なので、対象から除いた。

第二節　『安愚楽鍋』の片仮名の字体

本稿で底本とした国立国会図書館蔵本『安愚楽鍋』では、平仮名・片仮名に様々な字体が用いられている。片仮名表記語を見てゆくためには、この中から間違いなく片仮名だけを抜き出さなければならない。

そこで『漢字講座―4漢字と仮名』（明治書院）に付録として収録されている、平仮名・片仮名それぞれの字体・字源表を参考にして片仮名の認定を行った。この資料には、いくつかの作品がとりあげられているが、その中から、平仮名は『冥途の飛脚』（正徳元年初演）、『尋常小學讀本』（明治二七年発行）、『たけくらべ』（明治二九年発行）の字体を参考にした。また、片仮名は「『假字考』（岡田真澄著）による片仮名の字体・字源一覧」を用いた。これは『假字考』（文政五年刊）から片仮名に関する記事を抜粋したというものである。ほかに、築島裕氏の『日本語の世界5仮名』なども参考とした。

こうして、『安愚楽鍋』の片仮名の字体を調べた結果、以下述べるように判断することにした。

片仮名の「ハ」に似た字体の「ん」が頻繁に用いられているが、これは平仮名「は」の異体字であるから、とらない。また「ゝ」についても、ほとんどを平仮名の異体字とみなした。「ミニウト」などの場合は片仮名とする。「子」は「ネ」の異体字として片仮名とみなす。『假字考』の片仮

名に関する記事では「ネ」は「通行の片仮名以外のもの」とされているが、『安愚楽鍋』でも「ネ」が見られるのは「ダガネ」の一例のみであることから、明治初期も「ネ」より「子」が主として使われていたことが推測される。最も判断が難しかったのが「ツ」である。似たような字体が『冥途の飛脚』の平仮名に見られるが、それは非常に丸みのある曲線的なもので、『安愚楽鍋』の字体は比較的、直線的なものである。したがって、片仮名とみなすことにした。

その他、『安愚楽鍋』の片仮名の字体について気づいた点を二、三挙げておきたい。『安愚楽鍋』には「エ」は出てこず、すべて「ヱ」と表記されている。また、「オ」と「ヲ」が混用されているが、使い分けは見られないようだ。他に「マ」に一例だけ「一」が用いられているが『日本語の世界5仮名』の「仮名字体附表」の中で『十二天法古点』(一〇五〇年頃)を資料としたものに「一」という字体がみえる。最後に「ス」についてであるが、これも一例だけ「人」がみえる。これは「仮名字体附表」の『大日経疏康和五年点』(一一〇三年)を資料としたものに表れている。

総じて、『安愚楽鍋』の片仮名の字体は、現行のものとほぼ同じといってよいのではないだろうか。その中で例外が「ヱ」であると言える。このワ行の「ヱ」は現在の片仮名の字体としては見られず、「エ」を使用するが、『安愚楽鍋』ではそれとは逆に「ヱ」のみを使っているからである。また、一例だけ見られた「ネ」「一」「人」については、「ネ」が後に統一字体として用いられるようになるのに対し「一」「人」は消えてゆく運命にある字体であって、一例という数が示す意味が「ネ」と「一」「人」では全く違うということが言えるかと思う。

第三節　『安愚楽鍋』の片仮名表記語

第二節で述べたような判断に基づいて『安愚楽鍋』から片仮名表記語を抜き出した結果、一三五九箇所の語を得た。これらを大きく一一のグループに分けて示す。以下、それぞれのグループに属するものを数例ずつ挙げながら、それらの語がどのような理由で片仮名表記されているのかを分析してゆくことにする。例を示す場合、先に述べた「子」「ヱ」「一」「人」はそれぞれ現行の字体で表す。

(1)特定の用語　三箇所

ウタ　カヽリ　カケ合

土屋信一氏は「『浮世風呂』の片仮名表記語[注2]」で、「タロク」「ノリ地」、引用の「ト」について、

(略)「シテ」「ワキ」その他に見られるように、能狂言・歌舞伎・浄瑠璃などの台本には、一部の特定の用語を片仮名で表記する習慣があり、それが、そのまま、ここに伝わったのだと考えることができる。

と述べておられる。「ウタ」「カヽリ」「カケ合」も同様で、このような表記習慣に基づいて片仮名表記されたのだと思われる。なお、引用の「ト」は、本稿では(8)助詞のグループに入れた。

(2)擬声語　二五箇所

トン〳〵　ガア　ヘンサカホイ　ハ……

擬声語は、今日においても片仮名表記されるものである。『安愚楽鍋』には、「からから」「がらがら」のように平仮名表記のものもある。しかし、平仮名で表記されているのはこの二箇所くらいで、例外的だといってよいであろう。擬声語は、その名の示すとおり、音声的なことばであるから、片仮名の本来の機能である表音性が十分に生かされている。

(3)外来語　二八箇所

フランケット　シャボンさん　ガラス

外国から入ってきたことばの音を忠実に表す手段として片仮名が用いられていると思われる。しかし『安愚楽鍋』には「あめりか」のように平仮名のものや「羅紗」のように漢字で書いたものも見られる。外来語の片仮名表記の先駆は新井白石だと言われるが、それが一般化するのには時間がかかり、明治初期にはまだ定着していなかったと言えるであろう。

(4)意味の注記　七箇所

因循(いんじゅん)して　勉強(べんきょう)して　神速(しんそく)に　誠実(せいじつ)

振り仮名というと、現在では漢字の読み方を示すものが一般的であるが、左側に意味を表す振り仮名をあてることは、江戸中期の読本あたりから行われていたようである。[注4] ここでは平仮名で示された読みとの区別が明確になるように、意味には片仮名が用いられたと考えられるのではないだろうか。この場合、片仮名が語の意味を示すという点で、(2)(3)のグループの表音的な用い方とは異なっていると言える。

(5)なまり　四箇所

アリンス　ヨツス　ダツソ　オハヤシ

「アリンス」「ヨツス」は「あります」「ございます」の「廓訛り」として挙げられている。また「ダツソ」「オハヤシ」はそれぞれ「脱走」「お廃止」のことであり、仮名垣魯文はこれらを「くせ」だと注記している。このようなまりやくせは、その音声的特徴を表すために、表音性をもつ片仮名が用いられたのであろう。

(6)感動詞　二〇四箇所

モシ　ヨヤ　ハイ　コウ　ハア　マア

「是ヤ〳〵」や「まァ」などの片仮名の交ったもの（六箇所）は、片仮名表記語として扱っている。感動詞は、話しことばとしての色彩が強い語であるために、片仮名表記されていると思われる。これも、片仮名の表音性に由来していると言える。しかし、感動詞の片仮名表記の理由としては、土屋信一氏が『『浮世風呂』の片仮名表記語』で指摘されているように、文を際立たせる効果があるということも考えられる。『安愚楽鍋』において、片仮名表記された感動詞の文中の位置を調べてみると、二〇四箇所中一五七箇所が文頭に用いられている。また、文末のものも三箇所ある。したがって両方あわせると、78.4％が文頭・文末に用いられていることになる。『安愚楽鍋』では、ときどき句点の

ようなものが見られるものの、句読点の打ち方は今日の文章のようには確立されていない。したがって、句読点の明確でない『安愚楽鍋』の中では、文頭・文末の語を片仮名表記することによって文が際立つということが確かに言えると思われる。

(7)副詞・接続詞・連体詞　八四箇所

ナント　グツト　ホンニ　モウ　ツイ

このグループの中では、副詞が六九箇所と最も多い。接続詞は八箇所あるが、そのうち六箇所は逆接の接続詞だという特徴がある。連体詞は七箇所のうち「ホンの」が一箇所で、あとはすべて「アノ」である。平仮名の「あの」も一一例見られるが、これらは「あの娼妓は……」「あの説は……」など、単に離れている物や人などを指す意味で用いられることが多い。しかし、「アノ」の場合、六例中四例は「アノ人」「アノ旦那」というように、女性が自分の好い人、またはそれに近い人物を指すのに用いているものである。また「例の」という意味を含んだ「アノ」が一例見られる。このように、「アノ」が微妙なニュアンスを含んでいることや、逆接の接続詞が多いこと、及び、副詞がもつ用言を修飾するという性質を考え合わせれば、このグループの語の片仮名表記は、片仮名による強調的な表現効果をねらったものだと言えるのではないだろうか。

(8)助詞　三三五箇所

㋑引用の「ト」

おめしかへト　よろしいト

㋺終助詞・間投助詞

ひらきやすネ　ふさいだヨ　あのウナ

㋩格助詞・準体助詞・副助詞など

はやいのヤ　半年ヅゝ　はきものヲ

㋑の引用の「ト」の片仮名表記は、明治以前からの演劇脚本の習慣に基づいたものであり、これは今日でも「ト書き」ということばに残っている。㋺の終助詞・間投助詞は、二八九箇所あり、全片仮名表記語の21.3%を占めるという非常に用例の多いものである。この終助詞・間投助詞の片仮名表記は、一般的とは言えないが、今日でも見られるものである。これらは、文節末、文末におかれるものであるから、片仮名で表記することによって、文が際立つという効果が期待される。㋩の格助詞・準体助詞・副助詞などのグループには、㋑㋺にあたるもの以外の助詞の片仮名表記を入れた。これらには、助詞そのものの片仮名表記というよりは「……なンぞ」「……だツて」「すゐさつのゥ（＝を）」のようにその一部を片仮名で表したものが多く、これらは後に述べる捨て仮名の類としてとらえることもできるだろう。

(9)用言の活用語尾　二九一箇所

㋑イ音便・ウ音便・促音便・撥音便

引イて　わるウざんす　造ツて　及ンで

㋺その他の活用語尾

株ダ　あんまりでス　近イ　連込ム

このグループの中では、㋑で示したような音便化したも

のの表記がその78.4％を占める。このことから、活用語尾の片仮名表記は、ほとんどが発音の注記であると言ってよいであろう。一方、片仮名は漢字との対比の上でいわゆる意味をもたない部分の表記という機能ももっており、[注5]㋺で示した例は、このような機能に由来するものと思われる。

(10)捨て仮名の類　三七二箇所

㋑促音・撥音・長音

流行ツ子　たンびに　やァとこせ

㋺送り仮名

壯年サ　二タ組　いくツ　入レあはせに

捨て仮名の類は、全片仮名表記語の27.4％にあたる。すなわち、四分の一以上を占め、このグループの片仮名表記が最も多い。㋑、㋺はそれぞれ(9)用言の活用語尾の㋑、㋺と対応しており、やはり、㋑の例は片仮名の表音性に、㋺の場合は片仮名が漢字に対して意味を持たない部分を示してきたという伝統に基づくものである。

この捨て仮名の類と、活用語尾の片仮名表記は、山田俊雄氏が江戸時代の川柳を集めた『柳多留』初編・二編の表記の分析をされた結果、[注6]片仮名の役割として挙げられたものと一致する。また、『浮世風呂』にも、これらの片仮名表記が見られる。[注7]

(11)その他　八箇所

サの字　しまツ　こツ〳〵だ　つゝツく

デモ医者　イサ葉　タレ（二箇所）

(1)から(10)までのグループにあてはまらないものをその他とした。「サの字」はきざだということを指す語であるが、この場合の「サ」は、片仮名の表音性を用いたものであろう。「しまツ」「こツ〳〵だ」「つゝツく」については適当な理由を見出すことが難しい。「デモ医者」「イサ葉」「タレ」の片仮名表記は、今日に通じるものであると言えるだろう。「医者」に「デモ」がついただけで「いいかげんな医者」という意味になるのであるから、そのニュアンスを伝えるために「デモ」が片仮名で書かれたのではないだろうか。「イサ葉」は「斑葉」のことで、「タレ」と共に漢字の代用として片仮名が用いられたのではないかと思われる。今日、食品名が片仮名で書かれることがあるのは（カラシ、タマゴなど）この流れを汲んだものと言えるであろう。

以上、『安愚楽鍋』の片仮名表記語を(1)から(11)までのグループに分類し、それぞれの片仮名表記の理由を見てきた。その結果、音声表記や漢字に対する補助的役割といった、片仮名の基本的機能に由来する用例が非常に多いということがわかった。しかし、現代の片仮名表記に通じるようなものなどもあり、様々な片仮名表記語が見られた。すなわち『安愚楽鍋』の片仮名表記語は、現在から見れば異質に思われる活用語尾や捨て仮名などが残っているものの、『柳多留』や『浮世風呂』と比べると一歩進んで今日の片仮名表記語と近い様相を示し始めていると言うことができるであろう。

以上で、『安愚楽鍋』の片仮名表記語についての分析を終える。

結び

本稿では、『安愚楽鍋』の漢語における廃語と、片仮名表記語を中心に考察を行った。明治初期の話しことばをよく反映しているという点で『安愚楽鍋』の国語学的価値が高いわけだが、このようにして『安愚楽鍋』を見てきたことによって明治初期のことばの一端に触れることができたのではないかと考える。

廃語の割合や、片仮名の字体・用法などから、『安愚楽鍋』のことばの様相が、明治以前の面影を残しながらも、今日に近い状態を示しつつあるということが言えると思われるが、序で述べた、明治初期が江戸語から東京語への過渡期にあたるということの再確認ができたのではないだろうか。

しかし、考察の上で、不備な点も残った。第一章について言えば、『安愚楽鍋』の漢語は話しことばの中で用いられているものだが、対照のために用いた辞典には、話しことばばかりが収められているわけではない。したがって、話しことばという範囲に限定すれば、使われなくなった語の数はもっと多くなったかもしれないと考えられるのである。

第二章では、片仮名の分析の際に三編上・序の漢字片仮名交り文を対象から除いて、その役割については考察を行わなかったことや、片仮名の用法についてのみ述べて、漢字や平仮名の用法には触れることができなかったということが問題として残った。

また、漢語の調査の際に、登場人物の会話部分のみを扱ったが、本稿に限らず、『安愚楽鍋』のことばについて考察する場合に、その序や地の文などが対象外とされることが多い。今後は、このような部分についての検討も行われていかなければならないのではないかという感想をもった。

『安愚楽鍋』は、まだまだ多くの研究の余地を残している作品である。

注

1　廃語㋺は、語そのものは収められているが、その解釈の中に『安愚楽鍋』での用法が書かれていないものである。したがって、他の意味で用いられることが多くなったために、廃語となったと思われるので、ここでは廃語㋑だけを扱う。

2　『近代語研究第六集』所収。

3　『日本語の世界2日本語の展開』。

4　細川英雄「振り仮名―近代を中心に―」（『漢字講座―4漢字と仮名』所収）。

5　岩淵匡「片仮名の機能の歴史」（『講座日本語学6現代表記との史的対照』所収）による。

6　「近代・現代の文字」（『講座国語史2　音韻史・文字史』所収）。

7　土屋信一「『浮世風呂』の片仮名表記語」（『近代語研究第六集』所収）による。